

多くの技術者倫理の講義は、技術者の失敗あるいは怠慢のケースを採り上げそのようにしないためにどうするかという視点で組み立てられていると思われる。その結果、技術者倫理には後ろ向きのイメージが色濃くつきまってしまう。福島第一原子力発電所の大災害について、その原因の特定すらできていない状況で技術、技術者に対する信頼が大きく毀損されていることへの真摯な反省が必須であることは言を待たない。しかし技術者の仕事の多くが公衆の福利を増進し、自然災害から公衆を守る働きをしていることも事実である。

わたしは、技術者倫理を学ぶ最も重要な目的は、技術者が社会からの付託を認識し、その期待に沿う仕事をするることであると考えている。とすれば技術者倫理の講義において失敗事例よりも「良い仕事」という側面を重視すべきという視点が当然生まれるであろう。

そして良い仕事のなかでも“より良い”ものを求めることで、より深い技術者倫理の理解に到達できるであろう。さらに重要なことは“より良い”ことを追求することで、結果としてビジネスでの競争に勝てる新しい価値観を切り開き、新しい発想を得ることができることだと確信する。

それでは「良い仕事」とは一体何を指すのか。まず「良い仕事」と評価されるための必要条件があるはずであり、それを次のようにまとめたい。

その1は、技術者への社会の期待に込めていることである。社会は技術者に対して次の期待をしているとされている。

- (1) 科学技術の危害を抑止する
- (2) 公衆を災害から救う
- (3) 公衆の福利を推進する

この順序は、優先順位を示す。科学技術が高度に発達した現在、なによりもその責任が強く問われていることを自覚しなければならない。

その2は、技術者倫理の7つの原則に沿っていることである。

- (1) 公衆優先原則
- (2) 持続性原則
- (3) 有能性原則
- (4) 真実性原則
- (5) 誠実性原則
- (6) 正直性原則
- (7) 専門職原則

これらは一見自明であるが、原則相互に相反を生じたり、一つの原則の中に矛盾が生じることで実行が困難なケースがあることはよく知られている通りである。

(その1, その2はいずれも「第四版大学講義技術者倫理入門」杉本、高城著、丸善、2008-12-15)

「良い仕事」は上記の条件その1, その2のそれぞれについて1つ以上を満たしていなければならず、また全てに対して積極的に反するものであってはならない。

ところで、上記その1, その2に拠れば、技術者のほとんどの仕事は「良い仕事」と評価されるであろう。しかし、われわれが持つ印象としては技術者のほとんどの仕事を特段に「良い」と評価してはいないが、なかには「すばらしい」と評価される仕事もある。「良い仕事」にも高低があるようである。それでは非常によい、普通によい、まあまあ良い、という区分をするときの判断の基準はどのようであろうか。わたしは「良い仕事」の良さの程度を次の7つの項目で評価するこ

とを提唱している。

- ・ 自立性
- ・ 自律性
- ・ 結果の影響力
- ・ 責任の引き受け
- ・ 自己犠牲
- ・ 創造性
- ・ 非代替性

(注) この項目はまだ試行段階である。またここには記載しなかったが、どんな状況にも100%の技術というものは存在しない。マイナス要因の正当な評価も必要である

「良い仕事」を定義することで、通常よりもう一段高いレベルにまで例えば公衆優先原則を発動することで、従来とは異なる商品コンセプトを構築することができる。すなわち、技術者倫理の視点は「良い仕事」という概念を貫くことで、つぎのようにビジネスと結合する可能性を持つことになる、私は考えている。

- (1) 技術者倫理はビジネスの新しい発想法となり得る
- (2) 技術者倫理は生きるための新しい規範となり得る
- (3) 技術者倫理は良い仕事をするためのモチベーションの源泉となり得る
- (4) 技術者倫理は技術者の良心を呼び起こすキーワードとなり得る

良い仕事のなかでも、“より良い”ものを求めることで、より深い技術者倫理の理解に到達できる。そして、技術者個人の達成感、満足も得られる。ビジネスでの競争に勝てる。新しい価値観を切り開くことができる。そして自分自身が仕事に満足を得られる。これらはあくまでも可能性ではあるが、魅力的な可能性である。

心理学の分野ではポジティブ心理学という研究がなされているようである。精神疾患を治すだけでなく、通常の人生をより充実したものにするための研究である。技術者倫理における「良い仕事」への注目という着想の転換は、多方面でも同時多発的に行われているようである。

三井物産の槍田社長(当時)は会社が引き起こした大きな不祥事を解決させたのち、思い切った社内改革に着手した。新しいスローガンを「良い仕事」と名付け、つぎの3つの視点を中心に据えたとされている。

- ・ 世の中にとって役に立つものか … 社会の視点
- ・ お客様やパートナーにとって有益で付加価値をもたらすものか … 取引先の視点
- ・ 自分のやりがい・納得感につながるものか … 自分自身の視点

(以上、<http://japan.zdnet.com/cio/analysis/35027815/>より)

「良い仕事」という概念がビジネスの最前線において、現に有益な機能を発揮していることの一つの証左であろう。今後、さらに展開されることを望みたい。

(以上)